

連載

## 柔道・友情・平和

第3回

山下 泰裕

女子柔道のパイオニア、  
ラストティ・カノコギさん

その勇氣と行動力に学ぶ

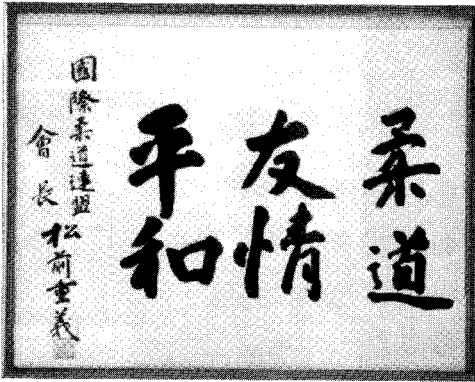
2004年のアテネ五輪では、女子柔道が金メダル5個を獲得して男子の3個を上回り、話題になった（日本は合計16個）。最近では、柔道に限らず、いろいろな種目への女性参加が進み、脚光を浴びている。

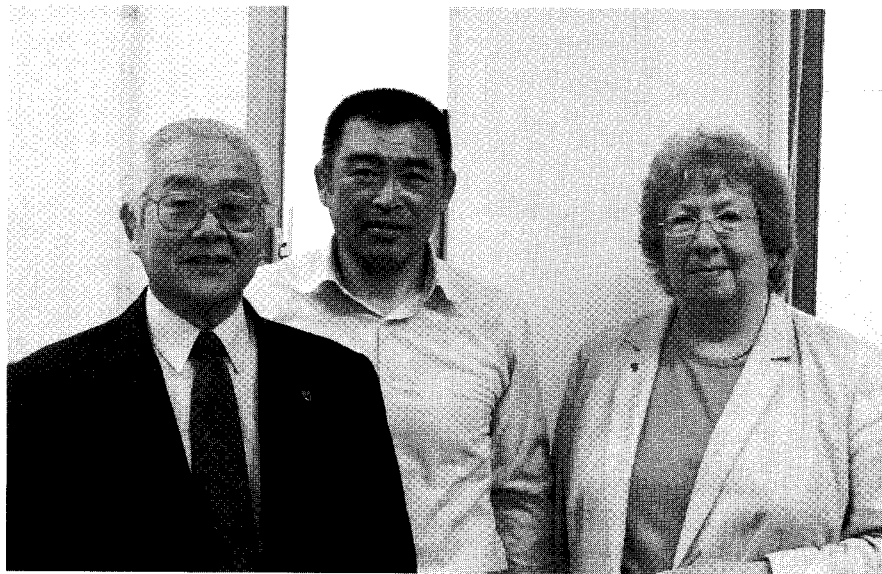
しかし、女子柔道の競技化と国際的な普及への道程は、決して平坦ではなかった。私は、IJF（国際柔道連盟）教育コーディネーターとして、その茨の道を認識している。草創期に、理想に燃えて努力した人々の流した汗を、我々は決して忘れてはならない。26年前に、初の世界女子柔道選手権大会で組織委員長を務め、1994年に世界女性スポーツ財団・国際女性スポーツ殿堂入り、2001年にはIJFから女子柔道のパイオニアとして表彰された米国のラストティ・カノコギさんとの交友を通して垣間見た、女子柔道に関する印象を述べる。

## ピッチの夢を叶えたい

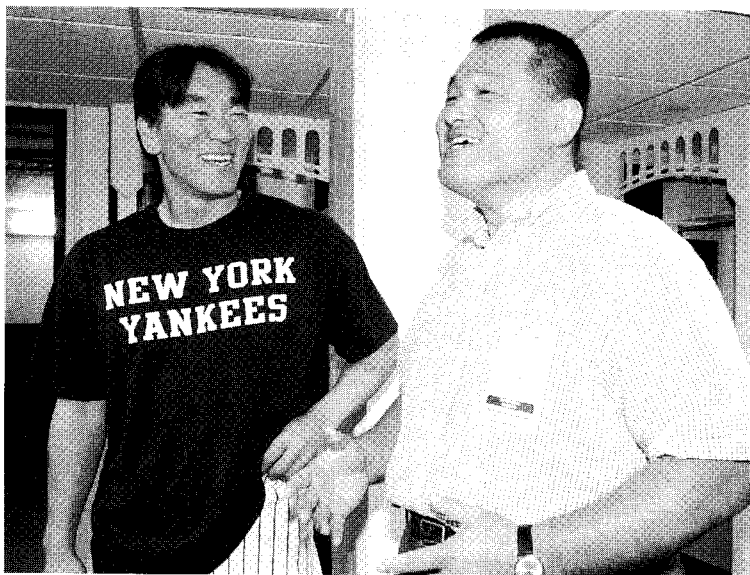
親友ラドミル・コバチェビッチの死を悼む文章の続きになるが、実は今、ピッチを慕う人々が集まって彼の夢を引き継ぐ財団を設立する動きが起きている。柔道を通して青少年を健全育成し、日本に留学させたいという彼の夢は、もしかしたら近いうちに実現するかもしれない。

ピッチは、いわゆる問題を抱えている若者の面倒をよくみていた。両親の愛情に飢えている若者をあの大らかな体躯とところで抱擁し、熱き正義感でもって指導したのだろう。その姿が目につかぶ。教え子や保護者たちが寄付を申し





鹿子木夫妻と佐藤宣践東海大学体育学部長



2003年7月20日、ヤンキースタジアムで（写真提供：時事通信社）

出ているようで、本当によい知らせだ。  
ピッチを支援した人々の中に旧知の鹿子木量平氏（日大卒）と夫人のラステイ・カノコさんがいる。財団の件もご夫妻から話をう

かがった。熊本出身の鹿子木氏には同郷のよしみで親しみを感じているし、ラステイさんは、柔道の世界に名が高い女性である。私は、現在、IJF理事として女子柔道の振興を図っているが、彼女の主

張や行動に注目し、いろいろなヒントを得てい

る。そこで、少しばかりラステイさんのことについて触れてみたい。  
**ヤンキースの松井秀喜選手を激励する**  
3年前、英会話特訓でニューヨークに滞在したときも、鹿子木夫妻には大変お世話になった。その

ときのエピソードはいろいろとあるが、ラステイさんのアイデアと思われることの一つをお話ししよう。

ある日、私は、鹿子木夫妻に誘われて野球のメジャーリーグ、ニューヨーク・ヤンキースの試合観戦に行った。するとヤンキーススタジアムでは、読売ジャイアンツから移籍した松井秀喜選手が待つ場所案内された。もちろん、期待されて米国に渡った松井選手を励ますことができ嬉しかったが、その模様が日本のテレビで放映されてしまった。私がニューヨークに滞在していることを知る人は少ない。多くの人が、「なぜ、山下が？」と思われたのではないだろうか。マスコミの方々も、「わざわざ松井選手の応援に来たのですか？」と質問するし、内心慌ててしまった。

松井選手は、私より体格が一回り大きい。試合結果にかかわらず日本のマスコミにきちんと対応すると聞き、日本で応援する人々への感謝や子どもたちへの励ましの



ローバルアリーナで第1回IJF  
女性コーチングセミナーを開催し  
た(3日間)。日本を含むアジア

動すること。そして、一人ひとり  
が仲間を増やすこと。そうした地  
道な行動がやがて力となる」



IJF女子コーチングセミナーにラスティさんを講師として招聘する。左から二人目がラスティさん

諸国、及びフラン  
スやニュージーラ  
ンド、韓国、南ア  
フリカなどから女  
性コーチらが約60  
名参加し、実技、  
講義などを通して  
資質向上を図つ  
た。私は、ラステ  
ィさんたちの努力  
があつて今日の女  
子柔道があること  
を参加者に知って  
もらいたいと考  
え、特別講師とし  
て招聘した。ラス  
ティさんの話は参  
加者の心をとらえ  
たようだ。夜のミ  
ーティングで語つ  
た次の言葉は、と  
りわけ印象深いも  
のだった。

### 柔道にがっかり、そして決心する

ラスティさんには、昨年の5月  
にも東海大学体育学部で講演いた  
だいた。その内容は、まさしく女  
子柔道の苦労話なので、抜粋して  
紹介する。

「まず、自分が行  
動すること。そして、一人ひとり  
が仲間を増やすこと。そうした地  
道な行動がやがて力となる」

私が柔道を始めたのは1955  
年のことです。今のように女子柔  
道は普及していません。試合もあ  
りません。女子を受け入れてくれ  
るクラブを見つけるのが大変でし  
た。当時ブルックリンYMCAに  
所属していた選手は男子40名、女  
子は私だけです。着替える場所す  
らなかったのです、更衣室として使  
ったのは掃除用具入れの場所でし  
た。

YMCAはとても強いクラブで  
した。私も練習を重ねて力をつけ、  
クラブの一員として認められるよ

うになりました。そんな時ニュー  
ヨーク州選手権大会があり、YM  
CAが決勝に駒を進めました。チ  
ームに一人欠員が出たため、私が  
選手に選ばれました。私は髪を短  
く切って、胸にはバンテージを巻  
いて男性のような格好をして試合  
に出ました。そして勝ちました。  
しかし、誰かが私が女性であるこ  
とを主催者に報告したためメダルを  
返上するか、チームが失格になる  
かという決断を迫られました。本  
当に残念でした。自分の人生に、  
そして柔道にがっかりしました。  
2度とこんな思いはしたくない、  
これから柔道を始める女性にも同  
じ思いはさせたくないと思いまし  
た。そして私はこの日の体験をき  
っかけに、「女子が男子と練習し  
なくても良い環境を作ろう」、「女  
子の柔道大会をつくろう」と決心  
したのです。

ラスティさんは失望を希望に変  
え、女子柔道の可能性を大きく広  
げていった。その行動から多くの  
ことを学ぶことができる。